

氏 名	こ ばやし てつ ろう 小 林 哲 郎
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 117 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	「文章完成法を応用したテスト SCT-B について」

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 中 康 裕 教 授 藤 原 勝 紀 教 授 岡 田 康 伸

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、心理査定法のうち、文章を用いた投映法的一种である文章完成法(SCT)を改良したSCT-Bという独自の方法の開発にかかわる論文である。第Ⅰ部では文章完成法テスト、第Ⅱ部では、著者の開発したSCT-B、についての2部構成となっている。

第Ⅰ部では、心理検査における言葉の役割から考察を始めて、文章完成法(SCT)について、その歴史を概観し、刺激文、施行法、評価法、投映レヴェルの各側面から詳細に検討している。一方、著者は「Ambiguity Tolerance(AT)の低い人は、同じ対象の肯定面、非底面の現実的共存を認知できない」ということを測定するために、同じ刺激文が繰り返し出現するSCT-MRというテストを考案した。しかし、ここにおいては、ATとの関連は何ら見られなかった。そこで、二面的認知をSCTで測定するために、SCT-BUTという方法を考案する。精研式文章完成法の刺激文の下に、もう1行設けて、先頭に、「が」という語を印刷したものがそれである。これを施行してみると、予想された反応以外にも、多様な反応を見いだすことができたが、負担からくる動機づけの低下と、「が」の格助詞としての使用が増える、という欠点が生じることとなった。そこで、SCT-BUTの問題点である、項目数の多さや、刺激文呈示の仕方を改良して考案したのが、SCT-Bなのである。

このSCT-Bとは、25の刺激文について、一旦、文章を完成させた後に、折り込んだ紙を抜げると、「が」のついた空白行が提示される。そして、もう一文書いてもらう、という2段階の課題となっているものである。

第Ⅱ部では、まず最初にSCT-Bの刺激文、施行法の説明をした後、出現比率などの基礎データを示し、続いて、評定について、詳細に説明を加えている。次いで、標準化されたテストに必要とされる、信頼性と妥当性についての検討があり、これらを確認している。そしてその研究過程で、反応パターンの独自の性質を臨床にも利用することを考えていくこととなる。

まず、神経症者のデータと、一般大学生のデータとを、比較検討する。その結果、神経症者群の方が高いパターンは、〈肯定肯定〉、〈否定否定〉、〈希望〉、〈決意〉の各項目であった。なかんずく、〈希望〉、〈決意〉は他力本願的、自力本願的な違いはあるものの、抑鬱や強迫性との関連がみられたので、神経症者に高く出た、と考えられた。また、〈過去現在〉は、「1、子どもの頃私は」で、多く出現するものであるが、神経症者は〈否定否定〉が多いため、有意に少ない結果となったと考えられた。

以上のような結果を踏まえて、更に考察を深めるために、著者の実践の場たる学生相談において、そこでのデータと臨床像とを照合させながら、詳細に検討してゆくこととなる。そこにおいて、主なものをあげてみると、〈肯定否定〉の高い人は、〈自己〉と〈否定否定〉が高いことが見いだされる。クライアントは、自分のことが分かってほしいという気持ちが強く、劣等感、攻撃性も強いもの、と考えられた。〈肯定肯定〉では、家族への愛着が強い傾向が見られた。〈否定否定〉では、劣等感や、強い攻撃性があるのに、空想に向かうのが特徴であり、クライアント群でも、現実にはいやな体験がある場合に出現する。〈例外〉では、健常者群の方がこれを多く使い、エネルギーを感じさせるが、衝動統制の問題があるようにみうけ

られた。〈受容〉では、健常者の中では、嫌なことも受容するいい面も見られたが、クライアントでみると、対人恐怖心性の強い人に多かった。〈希望〉では、抑鬱、強迫性などとの関連が強かった。また、他者に依存し、怒りを向けたり、固執の傾向が見られ、問題行動に走ることもある。〈不安〉では、ある程度エネルギーのある人が、対人関係の傷つきから生じた葛藤を抑圧しているとみられる。〈決意〉では、強迫性、抑鬱との関連が強かった。克服しようという意欲が強く、強迫的に努力するが、破綻すると抑鬱的になる傾向がみられた。〈自己〉では、対人関係の傷つきから劣等感にさいなまれている人が多く、不安になって、内省せざるをえない、あるいは、妄想との関連も考えられた。

かくして、著者が、二面制の認知の視点から出発して考案した SCT-B においては、さまざまな情報とともに、パーソナリティの特性がダイナミックに反映されることが示された。すなわち、このテストは臨床場面において有用なテストであることが提唱されているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、臨床心理行為の4本柱の一つ心理査定に関わる論者である。さて、心理査定法にもいろいろあるが、そのうち、パーソナリティに関わる検査法には、作業検査法、投映法などがある。投映法は、さらに、言語的、非言語的な方法に分かれ、さらに、双方、ともに、連想、構成、完成、選択、表現法などに細分化される。本論文は、そのうち、質問紙法の「文章完成法 (Sentence Completion Test: SCT)」に依拠し、そこから著者が創出した、独自の「SCT-B」という新しい方法の開発に至る歷程と、その信頼性、妥当性の検討をへて本法を開発した。さらに、著者の勤務したいくつかの大学を初めとする一般群の検査、ついで、著者の長年関わって来た学校臨床の場において、臨床群の検討等をおこない、この20年来一貫して追求して来たテーマである。かくして、この方法を、臨床的にこの分野において新しい地平を開きうる新法として提出したい、という意気込みをもって書かれた論文である。

さて第I部では、心理検査における言葉の役割をとりあげ、文章完成法 (SCT) について、その研究史を概観している。Tendler, AD (1940) が情緒洞察テストとして用いた歴史的経緯から説き起こし、Rotter, JB & Rafferty JE (1950) の ISB (Incomplete Sentence Blank), Loewinger, J et al (1970) の WUSCT (Washington Univ. Sentence Comp. Test), Exner, JE (1973) の SFSC (Self Focus Sent. Comp.) などを経る研究史が概観される。我が国に一般に行われているのは、Forer, RB (1950) の Structured SCT を出発点として、片口安史が改良発展させたものである [片口・早川 (1989)] とするが、ここら辺りの文献の整理の仕方が、日米の発展史に違いがあるとはいえ、クロノロジカルにすっきりしていない点がやや残念とされた。さて、SCT とは別に、著者は当初 Ambiguity Tolerance (AT) に関心を持ち、人格の二面性についての考察を桑原知子らと行っていた。そこで、「AT の低い人は、同じ対象の肯定面、否定面の現実的共存を認知できない」ということを測定するために、SCT において同じ刺激文が繰り返し出現する「SCT-MR」というテストを考案する。しかし、ここにおいて AT との関連は何ら見られず、そこで、二面的認知を測定するために、「SCT-BUT」という方法を更に考案することとなる。これは精研式文章完成法の刺激文の下に、もう1行設けて、先頭に、「が」という語を印刷したものである。これを施行すると、予想された反応以外に、多様な反応が見いだされたが、負担増からくる動機づけの低下と、「が」の格助詞としての使用が増える、という欠点が生じたため、「SCT-BUT」の問題点たる項目数の多さや、刺激文呈示の仕方を改良して考案されたのが、「SCT-B」であった。この「SCT-B」とは、25の刺激文について、一旦、文章を完成させた後に、折り込んだ紙を掀げると、「が」のついた空白行が提示され、もう一文書いてもらう、という2段階の課題となっているものである。これらの発展経過は極めて説得的であって、改良の方向性や、発展のあり方は高く評価された。しかし、肝心のこの方法の雛形が巻末にすら提示されていず、また、実際の例文が生のかたちで提示されていなくて、追隨者にとって体験的に把握しにくい点など、新法の提示としては幾分かの問題があることが指摘された。またその際、本論文の論理展開が、「ことば論」としてなのか、「テスト論」としてなのかの根本問題をあいまいにしたままの書き方がみられ、やや不整合である点も指摘された。

第II部においては「SCT-B」での信頼性や妥当性についての検討、そしてその研究過程での反応パターンの独自の性質を臨床にも利用せんと、神経症者及び一般大学生が比較検討されていくあたりはきわめて手堅くかつしっかりと行われていることも高く評価された。ただし、せっかく取り出された、著者のいう、[肯定否定] など、14の指標が、これからの追試

実施者にとって、より容易にスコアリングされるべく、適切な確な指示がなされておらず、また、その例示も、各項目の一つ一つについては相当詳しくなされているものの、初心者がとりくむには、おのおの項目にそうとう習熟することが要求され、YGなどの簡便性や、MMPIに比較して、改良すべき点もあることが指摘されている。

また、本論文において、その論考の主たるテーマとは少し外れるが、格助詞の「が」の3つの用法にほぼ即した、3つの用法例がともに頻出してよい筈なのに、本法を用いると、圧倒的に「対比的な反応」のみが出てくる点こそが、いわば本法の特殊性であり、かつ独自性の秘密を孕んでいると考えられるのに、その点の考察がなされていないことなどいくつかの点を今後に期待することとなった。

ともあれ、その場限りのお座なりで安易な風潮のある現代にあって、かつ、このところ心理臨床の領域においては関心の度合いの低い、文章査定法に取り組み、まったくオリジナルな一方法〔SCT-B〕を案出するに至るまで、20年以上にわたって、まったく同じテーマを追い続け、それなりに、しっかりと一つの方法を提示しえたことは、高く評価され、上記いくつかの瑕疵はあるものの、学位論文として価値あるものとして認められた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成17年2月17日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。